

里山保全に取り組むNPO法人「きんたろう倶楽部」(富山市西金屋)は20日、活動エリアの呉羽丘陵で、35年間調査が途絶えていた三つの古墳の実地調査を行い、整備や活用の可能性を探った。

(報道センター・藤木優里)

円墳の近くで小黒学芸員(右)から説明を受ける参加者

## きんたろう倶楽部

# 呉羽丘陵の古墳再調査

呉羽丘陵は市内有数の遺跡の密集地で、旧石器〜江戸時代の約200遺跡が見つかった。今回の三つの古墳は1984年に市教委の調査で存在が確認されたが、その後は発掘が行われていなかった。きんたろう倶楽部は、呉羽丘陵の魅力発信に古墳を生かせるべく、2016年から市埋蔵

文化財センターの小黒智久主査学芸員を講師に招いて講座を実施してきた。今回の調査にはメンバーや古墳・歴史に関心のある人ら約20人が参加した。



## 市の調査から35年ぶり

一行は、くれば山荘保養館(富山市西金屋)を出発し、フットパスコースにもなっている散策路を歩いた。「青竹の森」がある標高1255付近で、散策路周辺が古墳のように盛り上がっていることを確認。同行した小黒学芸員が周囲を調べ、人工的に作られた溝「周溝」が円を描くようにできていたことから、円墳であると判断した。しかし、盛り上がるの一部は、経年劣化による土砂の流出や散策路としての使用によって形が崩れていた。今回の調査で、古墳はいずれも私有地にかかっていることも分かった。中野康英副理事長は所有者と話し合おうとし、「雑木や竹を刈り、看板を付けるなどし、古墳があることを広めていきたい」と話した。

北日本新聞 平成31年3月2日(木)